明星大学心理学年報 2012, No.30, 7―16

原著

大学生の友人関係におけるソーシャルサポートの授受と自我同一性との関連[1]

磯 谷 俊 仁* 岡 林 秀 樹**

本研究の目的は，大学生において，友人とのソーシャルサポートの授受が，自我同一性に及ぼす影響とその性差を検討することである。大学生 356 名に無記名方式による質問紙調査を行い，313 名から回答を得た。分析の結果，サポートの授受が自我同一性に及ぼす影響には性差があり，男子学生は友人にサポートを提供することが自我同一性を確立させる上で重要であるが，女子学生は提供サポート量と受領サポート量のバランスがとれ，友人からサポートをもらえる関係が築かれているということが自我同一性を確立させる上で重要であることが示唆された。将来の研究では，性別による自我同一性確立過程の機序の違いについて，更に焦点をあてることが望まれる。

キーワード：ソーシャルサポート，自我同一性，青年期，友人関係

児童期から青年期にかけての人間関係の変化について，宮下（1995）は児童期までの生活の中心はあくまで“家庭”であるが，青年期においては家庭を離れ，人間関係の中心は友人との関係に移っていくとし，青年期の発達における友人関係の重要性を指摘している。

Erikson（1959）は青年期における発達課題として，自我同一性の確立を挙げている。自我同一性とは，“斉一性”，“連続性”，“帰属性”を基盤に確立される自己意識の総体のことである。“斉一性”とは自分が見た自己と他者から見た自己が同一の存在であるという認識，“連続性”とは以前の自分と現在の自分が同一の存在であるという認識，“帰属性”とは自分が何らかの社会的集団に所属しており，その集団との一体感を持つとともに，その集団成員に自分の存在が承認されているという感覚のことである。青年期は職業の決定等，将来に多大な影響を及ぼす選択を迫られる時期であるが，自我同一性の確立が青年期で達成されない場合，自我同一性拡散となり，青年期に行われなければならない重要な選択が上手くできない可能性が高くなる。また，青年期に自我同一性が確立されない場合，青年期の次段階にあたる初期成人期の発達課題である“親密性”の確立が難しくなる。そのため，青年期に自我同一性を確立することが後の発達において重要になると Erikson は考えていた。

それでは，青年期において重要性が指摘されている友人関係と自我同一性の確立には関連があるのだろうか。友人との関係をより具体的に把握するために，援助のやりとり，すなわちソーシャルサポートの授受という視点でとらえることが望ましいように思われる。ソーシャルサポートとは，Caplan（1974）によると，家族や友人，隣人等，ある個人を取り巻く様々な人々からの有形・無形の援助を指すものとされる。他者からソーシャルサポートを受けることによるストレスの緩和効果や，身体的あるいは心理的な健康への影響についての多くの研究が行われてきたが，近年では個人はサポートの受け手であると同時にサポートの送り手でもあるという観点からの研究を行う必要性が指摘されており，ソーシャルサポートの授受に焦点をあてた研究が，徐々に行われてきている。

友人とのソーシャルサポートのやり取りと自我同一性の確立との関係について実施された 3 つの先行研究を概観する（宮下・渡辺, 1992 ; 宮下, 1998 ; 福岡・友野・橋本, 2000）。宮下・渡辺（1992）は大学生の男子学生 89 名，女子学生 119 名を対象に自我同一性と中学時代・高校時代・大学時代の友人・両親・教師それぞれとの関係を男女別に調査した。その結果，男子学生においては高校時代には父親から，大学時代には教師から助言や理解といったサポートを得られる関係が築かれていることが，大学生の時の自我同一性の確立にとって重要

Correspondence concerning this article should be sent to: Toshihito Isoya, Graduate School of Humanities, Meisei University, Hodokubo, Hino 191-8506, Japan (e-mail: 09mp005@stu.meisei-u.ac.jp)

* 明星大学人文学研究科

** 明星大学人文学部心理学科

[1] 本論文は，第一著者が平成 22 年度明星大学人文学研究科心理学専攻に提出した修士論文をもとに，仮説の整理および新たな考察の追加を行ったものである。本論文の内容の一部については，日本心理学会第 75 回大会において発表した。

であるが，女子学生においては高校時代や大学時代に友人との情緒的サポートの授受が重要であることが明らかになった。また，宮下（1998）は，男子学生 90 名，女子学生 173 人を対象に，友人関係と自我同一性の関連を調査した結果，男子学生では“真面目である”，“常識がある”，“几帳面である”ような“社会性”を備えた友人関係を持つことが自我同一性の確立にとって重要であることが明らかになった。一方，女子学生は“社会性”に加え，“よく相談に乗ってくれる”，“落ち込んだ時励ましてくれる”，“喜びや悲しみを共有できる”ような“精神的な安らぎ・相互信頼”が得られる友人関係を持つことや，“行動力がある”，“活発である”，“積極的である”といった“社交性”を備えた友人関係を持つことが自我同一性の確立にとって重要であることが明らかになった。福岡・友野・橋本（2000）は，女子大学生 120 名（平均年齢 18.81 歳）と既婚中年女性（成人女性）121 名（平均年齢 41.32 歳）を対象に，受領サポートに関する質問項目を 8 項目設定し，各項目についてあてはまる人物が誰であるかを最高 9 名まで挙げさせ，それらの人々との関係に満足しているかを調査した。そして，受領サポート源となる人物との関係について，親や兄弟等の血縁者との関係と友人等の非血縁者との関係に分け，それぞれの関係において受領サポートに該当する数と自我同一性の関連を検討した。その結果，まず，女子学生よりも成人女性のほうが自我同一性が確立されていることが明らかになった。そして，成人女性は友人等の非血縁者からサポートを受領できる可能性がある人ほど自我同一性の達成度が高かったが，女子学生は血縁者・非血縁者問わず多くの人からサポートを受領できる可能性がある人ほど，自我同一性の達成度が高いことが明らかになった。

これらの先行研究から考えると，大学生の男子学生，女子学生ともに，青年期の友人関係が自我同一性の確立に一定の影響を及ぼしていると言えるだろう。特に女子学生は精神的に支え合うこと（情緒的サポートの授受）のできる友人関係を持つことが，自我同一性の確立に影響することが考えられる。青年期における友人との関係の持ち方には性差があり，そのことが自我同一性の確立に影響を及ぼしているようである。竹澤・小玉（2004）の研究では，男子学生も女子学生も情緒的依存欲求が高いほど他者信頼感が高かったが，それに加えて，女子学生は情緒的依存欲求が高いほど自己信頼感も高いという特徴がみられた。つまり，女子学生においては情緒的依存欲求の高さが，青年期における適応的な発達に作用していることがうかがえる。友人との信頼できる関係を基盤とした自己信頼感が，自我同一性の確立を促進させる可能性も考えられる。

ソーシャルサポートの授受が自我同一性の確立にどのようなメカニズムで影響を及ぼしているのかについては，はっきりとした理論的説明はなされていないが，サポートの授受の健康への影響については，2 つの考え方が提出されている。1 つは，サポートの提供量と受領量の相対的なバランスが取れている場合には，健康が良好に保たれるが，そのバランスが崩れると健康が損なわれるという“衡平理論（周・深田, 1996）”である。森本（2006）は，大学生を対象にした研究で，相対的バランスだけではなく，絶対的な量にも注目し，精神的健康が維持されるのはソーシャルサポートの受領と提供がともに多い場合であり，両者のバランスがとれていない場合や受領と提供がともに少ない場合には精神的健康が悪化することを示し，衡平理論を一部修正している。もう 1 つは，サポートの提供のみが健康に有益な影響をあたえる（Brown, Nesse, Vinokur & Smith, 2003）という考え方である。Brown et al.（2003）は 65 歳以上の高齢者を対象に，道具的サポートと情緒的サポートを他者に提供していることが死亡率を低下させることを明らかにした。また，同じサポートの提供でも，情緒的サポートのほうが道具的サポートよりも死亡率を低下させることも示した。Brown et al.（2003）は，これらの結果に関して，多くの社会心理学的研究において，サポートの提供が肯定的感情に繋がっている（例, Cialdini & Kenrick, 1976）ことから，サポートの提供によって喚起された肯定的感情が健康を増進させる可能性があると示唆している。しかし，Brown et al.（2003）の研究は，高齢者を対象とした研究であるため，この研究結果を日本の青年にそのまま適用することは難しいだろう。また，サポートの授受が自我同一性の確立に，どのような機序を経て影響を及ぼすのかについてはまだ分からないところが多い。

これらを踏まえ，本研究では，大学生において，友人とのソーシャルサポートの授受が，自我同一性の確立に及ぼす影響を検討することを目的とする。具体的には，仮説 1“サポートの授受がともに多いほど，自我同一性が確立される”，仮説 2“サポートの授受が自我同一性に及ぼす影響には性差がある”について検討する。

まず仮説 1 を立てた理由であるが，福岡他（2000），宮下・渡辺（1992）の研究から，サポート授受の量と自我同一性の確立には正の関係があると考えられる。ま

た，サポートの授受がともに多い場合には，その人を取り巻くサポートの交換が可能な友人ネットワークが広いことが考えられる。また，森本（2006）の研究において，ソーシャルサポートの提供と受領がともに多い場合に精神的健康が最も維持されていることから，サポートの授受がともに多い場合には自我同一性得点が最も高くなるであろう。衡平理論から考えると，サポートの提供量と受領量との間に差がある場合には，負債感や負担感を抱くため自我同一性得点はやや低いものとなるだろう。サポートの授受がともに少ない場合には自我同一性得点が最も低くなるであろう。以上の理由から，仮説 1 を設定した。

次に仮説 2 を立てた理由であるが，宮下・渡辺（1992）の研究から，男子学生は親や教師との関係が自我同一性の確立に大きな影響を及ぼしている反面，友人との関係はそれほど自我同一性の確立に影響を及ぼしていない。よって，本研究でも男子学生の場合，友人とのソーシャルサポートの授受は自我同一性の確立にあまり影響を及ぼさないと考えられる。一方，福岡他（2000），宮下・渡辺（1992），および，宮下（1998）の研究から，女子学生においては友人とのサポート授受の量と自我同一性の確立に正の関係があると考えられる。また，ソーシャルサポートを多く受領している人は情緒的依存欲求も高くなると考えられるが，竹澤・小玉（2004）の研究によると，男子学生は情緒的依存欲求と自己信頼感に関係がなかったのに対し，女子学生は情緒的依存欲求が高いほど他者信頼感だけでなく自己信頼感も高くなっていた。女子学生において，友人との信頼できる交流が自我同一性の確立を促進させると仮定するならば，友人とのサポート授受が多いほど自我同一性が確立されると考えられる。以上の理由から，仮説 2 を設定した。

方　　法

調査時期および調査方法

2010 年 5 月 13 日から 6 月 17 日の間に無記名方式による質問紙調査を行った。調査紙は大学の講義時間に配布をし，その場で回収した。その場での回収が難しい場合，後日心理学研究室に備え付けた回収箱に質問紙を入れてもらった。

調査対象

大学生 356 名を対象に質問紙調査を行い，そのうち 313 名から回答を得た。調査回答者の基本属性は，性別に関しては男子学生 128 名，女子学生 183 名，学年に関しては 1 年生 109 名（男 45 名，女 64 名），2 年生 90 名（男 35 名，女 54 名，性別不明 1 名），3 年生 82 名（男 38 名，女 43 名，性別不明 1 名），4 年生 32 名（男 10 名，女 22 名）であった。年齢の分布は 18〜23 歳であった。

質問紙の構成

受領サポート（福岡・橋本，1997）6 項目，提供サポート 6 項目，自我同一性尺度（下山，1992）10 項目を用いた。受領サポート尺度（福岡・橋本，1997）の質問項目は“アドバイス・指導”，“なぐさめ・励まし”からなる情緒的サポートを測定するための 6 項目と，“物質的・金銭的援助”，“具体的行動による援助”からなる手段的サポートを測定するための 6 項目の合わせて 12 の質問項目で構成されていたが，本研究では青年期の友人関係において，より重要であると考えられる情緒的サポートを測定する 6 項目を使用した。受領サポートを測定するために，“大学に入学してから，普段の生活の中で友人は以下のことをどれぐらいしてくれますか。最もあてはまる数字に○をつけてお答えください。”と尋ね，“ぜんぜんしてくれない”，“あまりしてくれない”，“たまにしてくれる”，“しばしばしてくれる”，“しょっちゅうしてくれる”，の選択肢の中から一つを選択して回答してもらった。福岡・橋本（1997）の研究では，これら 6 項目のクロンバックの α 係数は .89 であった。

提供サポートの測定には受領サポートの測定に用いた質問項目の語尾を“…してあげる”といったように文章を改変して使用した。提供サポートを測定するために，“大学に入学してから，普段の生活の中で友人に以下のことをどれぐらいしてあげますか。最もあてはまる数字に○をつけてお答えください。”と尋ね，“ぜんぜんしてあげない”，“あまりしてあげない”，“たまにしてあげる”，“しばしばしてあげる”，“しょっちゅうしてあげる”，の選択肢の中から一つを選択して回答してもらった。提供サポート・受領サポート得点ともに 1 点から 5 点まで順に配点した。Appendix Ⅰに受領サポート尺度の質問項目を，Appendix Ⅱに提供サポート尺度の質問項目を，それぞれの回答分布とともに示した。

自我同一性尺度（下山，1992）の質問項目は自我同一性確立尺度 10 項目と自我同一性基礎尺度 10 項目の合わせて 20 項目から構成されているが，本研究では自我同一性の確立に焦点をあてているため，自我同一性確立尺度の 10 項目のみを用いた。自我同一性確立尺度は，社会的状況における自我同一性の確立に関連する項目で構成されており，主として主体性，個性，社会性といった青年期後期の発達課題に関わる側面を測

定するものである。自我同一性確立の程度を測定するために，それぞれの項目に対して“現在のあなた自身についてどう感じますか。最もあてはまる数字に○をつけてお答えください。”と尋ね，“あてはまらない”，“どちらかといえばあてはまらない”，“どちらかといえばあてはまる”，“あてはまる”，の選択肢の中から一つを選択して回答してもらい，順に1点から4点まで配点した。下山（1992）の研究では，自我同一性確立尺度のクロンバックの α 係数は.82であった。

結　　果

本研究ではSPSS 12.0 J for Windowsを分析に用いた。最初に，本研究の調査データをもとに，質問紙の尺度の信頼性を検討した。その結果，受領サポート尺度のクロンバックの α 係数は.91で，提供サポート尺度のクロンバックの α 係数は.92であった。また，自我同一性確立尺度のクロンバックの α 係数は.83であった。これらの結果から，本研究で用いた尺度の内部一貫性は全体的に高い信頼性があることが示された。

次に本研究では，受領サポート量と提供サポート量による自我同一性確立得点の差異を被験者間計画の分散分析によって検討した。その際に，受領サポート量と提供サポート量については，各サポート得点の分布において，それぞれの群ごとの自我同一性確立得点の差異を明らかにした。下位33%未満を低群，33%以上66%未満を中群，66%以上を高群というように，得点別に3群に分けた。男女合計および男女別に，受領サポート量と提供サポート量によるそれぞれの群の人数や自我同一性確立得点の平均値および標準偏差を，Table 1に示した。受領サポート低群かつ提供サポート高群に属する人数は男女合計でも6人であり，特に少ない人数であった。

サポートの受領量・サポートの提供量を独立変数，自我同一性確立得点を従属変数とした2要因の分散分析を行った。その結果，サポート提供量の主効果が有意であり（$F(2,295)=3.33$, $p<.05$），Tukey法による多重比較の結果，提供サポート低群よりも提供サポート高群のほうが自我同一性確立得点が高く（$p<.001$），提供サポート中群よりも提供サポート高群のほうが自我同一性確立得点が高かった（$p<.01$）。

サポートの受領量，サポートの提供量，性別を独立変数，自我同一性確立得点を従属変数とした3要因の分散分析を行った結果，サポートの提供量（$F(2,284)=3.90$, $p<.05$）と性別の主効果が有意であり（$F(1,284)=10.50$, $p<.001$），Tukey法による多重比較の結果，提供サポート低群よりも提供サポート高群のほうが自我同一性確立得点が高く（$p<.001$），提供サポート中群よりも提供サポート高群のほうが自我同一性確立得点が高く（$p<.01$），女子学生よりも男子学生のほうが自我同一性確立得点が高かった。また，サポートの提供量と性別の間に交互作用がみられ（$F(2,284)=4.19$, $p<.05$），サポートの提供量とサポートの受領量と性別の間に交互作用がみられた（$F(4,284)=3.17$, $p<.05$）。

交互作用の内容を明らかにするために男女別に分析した結果，男子学生はサポートの提供量の主効果が有意であり（$F(2,115)=6.00$, $p<.01$），Tukey法による多重比較の結果，提供サポート低群よりも提供サポート中群のほうが自我同一性確立得点が高く（$p<.05$），提供サポート低群よりも提供サポート高群のほうが自我同一性確立得点が高かった（$p<.001$）（Figure 1）。

一方で，女子学生は，サポートの受領量とサポートの提供量に交互作用がみられた（$F(4,169)=3.33$, $p<.05$）。

Table 1　Descriptive Statistics of Identity Establishment Score in Nine Groups as per the Amount of Support Received From and Provided to Friends

		Support provided to friends	Identity establishment score								
			Total			Male			Female		
			n	*M*	*SD*	*n*	*M*	*SD*	*n*	*M*	*SD*
Support received from friends	Low	Low	60	25.07	4.61	38	25.55	4.67	22	24.23	4.50
		Middle	19	26.16	4.82	8	28.75	6.11	11	24.27	2.53
		High	6	25.00	5.62	3	29.00	5.20	3	21.00	2.00
	Middle	Low	25	24.76	4.27	9	27.22	4.06	16	23.38	3.84
		Middle	64	25.95	5.40	21	27.33	6.06	43	25.28	4.98
		High	15	30.13	4.90	9	30.78	4.35	6	29.17	5.91
	High	Low	13	24.92	4.70	6	21.50	3.73	7	27.86	3.29
		Middle	40	25.05	5.54	16	28.06	5.11	24	23.04	4.96
		High	60	27.80	4.92	14	29.29	5.47	46	27.35	4.71

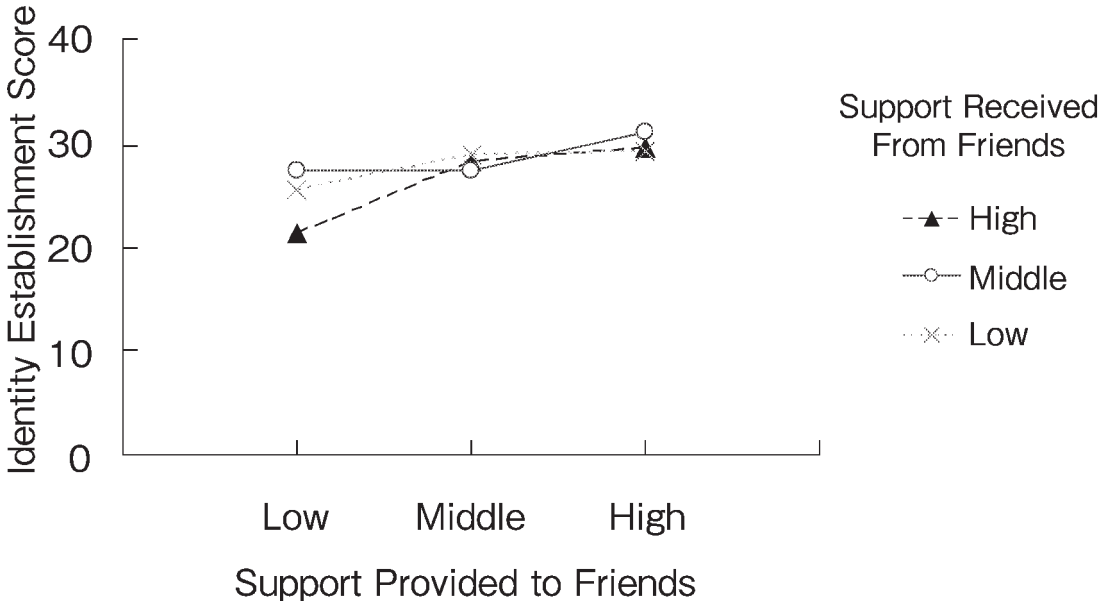

Figure 1　Differences in identity establishment score as per the amount of support received from and provided to friends among male students

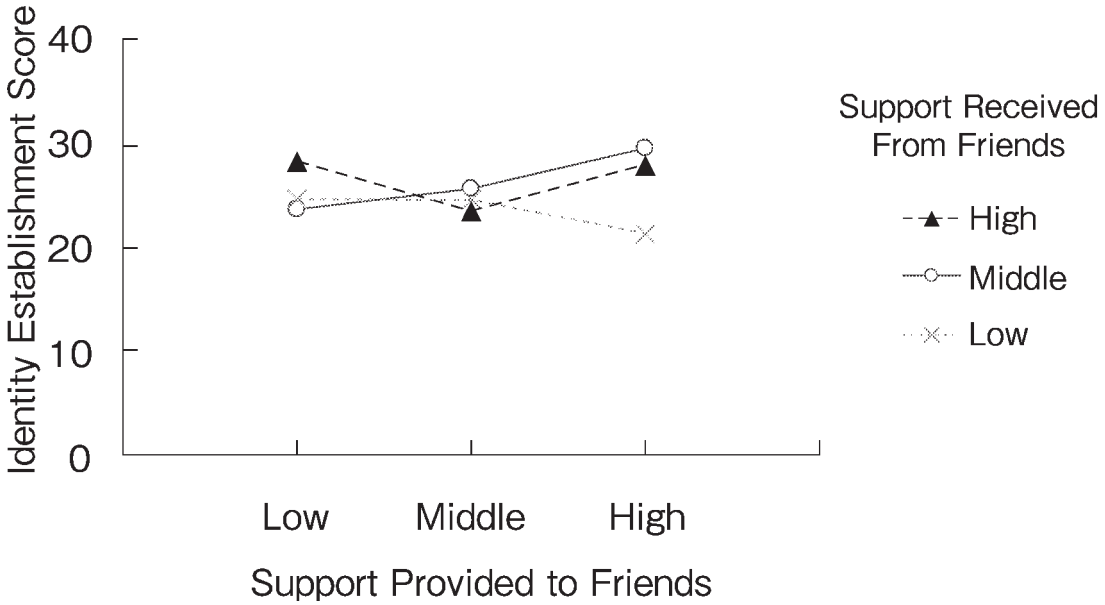

Figure 2　Differences in identity establishment score as per the amount of support received from and provided to friends among female students

この女子学生にみられた交互作用の詳細を明らかにするために下位検定を行った結果，受領サポート中群においては，提供サポート低群よりも提供サポート高群のほうが自我同一性確立得点が高かった（$p<.05$）。受領サポート高群においては，提供サポート中群よりも提供サポート低群のほうが自我同一性確立得点が高く

（$p<.05$），提供サポート中群よりも提供サポート高群のほうが自我同一性確立得点が高かった（$p<.001$）。また，提供サポート高群において，受領サポート中群のほうが低群よりも自我同一性確立得点が高かった（$p<.05$）（Figure 2）。

考　　察

大学生全体を対象にサポート授受の自我同一性への影響を検討した結果，提供サポートのみ自我同一性に影響がみられ，受領サポートには有意な効果はみられなかった。この結果により，“サポートの授受がともに多いほど，自我同一性が確立される”という仮説１は棄却された。提供サポートのみが自我同一性の確立に影響した理由としては，サポートを友人に提供する学生の自尊心や有能感が高まり，その高い自尊心や有能感が自我同一性の確立を容易にさせたためということが考えられる。そのことはBrown et al.（2003）の研究と一致するものである。一方，サポートを友人から受ける場合は，自尊心や有能感は高まらないため，自我同一性の確立の促進には繋がらなかったと考えられる。

サポートの授受の自我同一性への影響の性差を検討した結果，サポートの提供量とサポートの受領量と性別の間に交互作用がみられた。女性においてサポート授受の量と自我同一性の確立に正の関係があるという仮説のパターン通りではなかったが，この結果から，“サポートの授受が自我同一性に及ぼす影響には性差がある”という仮説２は支持された。男子学生においてサポートの提供量の主効果が有意であった理由としては，仮説１に対応する考察で示したのと同じ理由が考えられる。

女子学生の自我同一性の確立とサポートの授受との関係で特徴的だったのは，受領サポートが少なく，提供サポートが多い場合に，女子学生の自我同一性確立得点が特に低くなっていたことである。このことに関しては，衡平理論（周・深田, 1996）で説明ができるだろう。つまり，受領サポートが少なく，提供サポートが多いために，負担感が高まり，それが女子学生の自我同一性の確立を阻害したのではないかと考えられる。

また，女子学生においては受領サポートが多い場合には，提供サポートが多い場合だけではなく，提供サポートが少ない場合も，自我同一性が確立されていた。このことから，女子学生の自我同一性の確立には，友人からサポートをもらえる関係が築かれていることが重要な意味を持っている可能性が考えられる。友人からサポートをもらえる関係は，友人から安心感を得られるような関係であると考えられる。上記の結果は，女子学生は“精神的な安らぎ・相互信頼”が得られる友人関係を持つことが，自我同一性の確立に重要な意味を持つという宮下（1998）の研究で得られた知見とも一致するものである。また，この結果は，女子学生は情緒的依存欲求が高いほど他者信頼感だけでなく自己信頼感も高いという竹澤・小玉（2004）の研究結果に沿ったものでもあり，友人との信頼できる交流が自我同一性の確立を促進させるという仮定通りであると考えられる。友人からサポートを受領することにより，その友人への信頼感が高まり，その信頼感を基盤とした友人関係で培われた自己信頼感が，自我同一性の確立という青年期における適応的な発達に作用したことが考えられる。

結　　論

全体的にはサポートの提供量の多さが自我同一性の確立に影響している可能性が示唆された。本研究で“サポートの授受が自我同一性に及ぼす影響には性差がある”という仮説２が支持されたことで，男子学生はサポートを提供することが自我同一性の確立に影響を与えている可能性が示唆された。この理由としては，サポートを友人に提供する男子学生は，自尊心や有能感が高まり，その高い自尊心や有能感が自我同一性の確立を容易にさせたということが考えられる。一方，サポートを友人から受ける場合は，自尊心や有能感は高まらないため，自我同一性の確立の促進には繋がらなかったと考えられる。

女子学生は受領サポートが少なく，提供サポートが多い場合に友人にサポートを提供しても，見返りとしてのサポートがもらえないという負担感が高まり，この負担感が自我同一性の確立を阻害したことが示唆された。また，女子学生において受領サポートが多い場合には，提供サポートが多い場合だけではなく，提供サポートが少ない場合も，自我同一性が確立されていることから，女子学生の自我同一性の確立には，友人からサポートをもらえる関係が築かれていることが重要な意味を持っている可能性が示唆された。つまり女子学生に関しては，友人からサポートをもらえる関係が築かれており，そのような友人との信頼できる交流を基盤として自己への信頼が高まり，周囲から疎外されていないことが自我同一性を確立させる上で重要であることが示唆された。

上記のように，本研究ではサポートの授受が自我同

一性の確立に及ぼす影響には性差があるということが明らかになったものの，このような性差がどのような機序で現れたのかについての明確な説明はできない。何故，サポートの授受が自我同一性の確立に及ぼす影響に性差が出たのかについては，今後の研究で明らかにしていく必要があるだろう。また，本研究では分析の際に合計 9 つの群を設定したが，群によっては極めて少数の人数になってしまった。より精度の高い分析を行うためには，更に多くの人数を対象に研究を行う必要があるだろう。最後に，本研究では一時点での調査しか行っていないため，時間を追った縦断研究的な手法は取られていない。今後は本研究で得られた因果関係をより明確にするために複数時点での調査を行い，縦断データを用いた研究を行う必要があるだろう。

引用文献

Brown, S. L., Nesse, R. M., Vinokur, A. D., Smith, D. M. (2003). Providing social support may be more beneficial than receiving it : results from a prospective study of mortality. *Psychological Science*, **14**, 320-327.

Caplan, G. (1974). *Support systems and community mental health.* New York : Behavioral Publications. （カプラン, G.　近藤喬一・増子肇・宮田洋三（監訳）（1979）．地域ぐるみの精神衛生星和書店）

Cialdini, R. B., & Kenrick, D. T. (1976). Altruism as hedonism : A social development perspective on the relationship of negative mood state and helping. *Journal of Personality and Social Psychology*, **34**, 907?914.

Erikson, E. H. (1959). *Identity and the life cycle (selected papers of E. H. Erikson).* New York : International University Press. （エリクソン, E. H.　小此木啓吾（編訳）（1973）．自我同一性-アイデンティティとライフ・サイクル誠信書房）

福岡欣治・橋本　宰　(1997)．大学生と成人における家族と友人の知覚されたソーシャル・サポートとそのストレス緩和効果心理学研究, **68**, 403-409. （Fukuoka, Y., & Hashimoto, T. (1997). Stress-buffering effects of pereived social supports from family members and friends : A comparison of college students and middle-aged adults. *Japanese Journal of Psychology*, **68**, 403-409.）

福岡欣治・友野江都子・橋本　宰　(2000)．女子学生と既婚中年女性におけるソーシャル・サポート・ネットワークと自我同一性　静岡県立大学短期大学部研究紀要, **14**, 63-76. （Fukuoka, Y., Tomono, E., & Hashimoto, T. (2000). Social support networks and ego-identity of female college students and middle-aged women. *Annual Report of University of Shizuoka, Junior College*, **14**, 63-76.）

周　玉慧・深田博巳　(1996)．ソーシャル・サポートの互恵性が青年の心身の健康に及ぼす影響　心理学研究, **67**, 33-41. （Jou, Y. H., & Fukada, H. (1996). The effects of social support reciprocity on mental and physical health of young adults. *Japanese Journal of Psychology*, **67**, 33-41.）

宮下一博　(1995)．青年期の同世代関係　落合良行・楠見孝（編）講座生涯発達心理学第 4 巻　自己への問い直し：青年期金子書房　pp. 155-184. （Miyashita, K.）

宮下一博　(1998)．青年の集団生活への関わり及び友人関係とアイデンティティ発達との関係　千葉大学教育学部研究紀要　第一部, **46**, 27-34. （Miyashita, K. (1998). Relations of participation in group activities and friendship to identity development in adolescence. *Bulletin of the Faculty of Education, Chiba University. Part I*, **46**, 27-34.）

宮下一博・渡辺朝子　(1992)．青年期における自我同一性と友人関係　千葉大学教育学部研究紀要　第一部, **40**, 107-111. （Miyashita, K., & Watanabe, T. (1992). The relationship between ego identity and friendship in adolescence. *Bulletin of the Faculty of Education, Chiba University. Part I*, **40**, 107-111.）

森本寛訓　(2006)．ソーシャル・サポートの互恵性と精神的健康との関連について　川崎医療福祉学会誌, **16**, 325-328. （Morimoto, H. (2006). The relationship between social support reciprocity and mental health. *Kawasaki Medical Welfare Journal*, **16**, 325-328.）

下山晴彦　(1992)．大学生のモラトリアムの下位分類の研究・アイデンティティの発達との関連で　教育心理学研究, **40**, 121-129. （Shimoyama, H. (1992). A study on the subclassification of moratorium of university students : In relation to the identity development. *Japanese journal of educational psychology*, **40**, 121-129.）

竹澤みどり・小玉正博　(2004)．青年期後期における

依存性の適応的観点からの検討教育心理学研究, **52**, 310-319. (Takezawa, M., & Kodama, M. (2004). Development of an interpersonal dependency scale : A positive view of dependency. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **52**, 310-319.)

Appendix I　受領サポート質問項目と回答分布（N＝313）

質問項目	選択肢					
	ぜんぜんしてくれない	あまりしてくれない	たまにしてくれる	しばしばしてくれる	しょっちゅうしてくれる	無回答
1．厄介な問題に頭を悩ませているとき，冗談を言ったり一緒に何かやったりして私の気をまぎれさせてくれる	4.1	4.8	24.8	39.5	26.1	0.6
2．精神的なショックで動揺しているとき，慰めてくれる	4.8	4.5	28.0	35.7	26.4	0.6
3．勉強や仕事のことで問題を抱えているとき，アドバイスをしてくれる	3.5	8.6	27.7	35.0	24.8	0.3
4．学校や職場，地域，家庭などでの人間関係について悩んでいるとき，相談に乗ってくれる	6.7	5.7	23.6	40.4	22.9	0.6
5．落ち込んでいるときに元気づけてくれる	4.1	3.2	19.4	38.2	34.4	0.6
6．自分にとって重要なことを決めなくてはならないとき，アドバイスをしてくれる	4.1	8.3	30.6	37.6	19.1	0.3

Appendix II　提供サポート質問項目と回答分布（N＝313）

質問項目	選択肢					
	ぜんぜんしてくれない	あまりしてくれない	たまにしてくれる	しばしばしてくれる	しょっちゅうしてくれる	無回答
1．厄介な問題に頭を悩ませているとき，冗談を言ったり一緒に何かやったりして友人の気をまぎれさせてあげる	3.5	7.0	26.8	46.5	15.9	0.3
2．精神的なショックで動揺しているとき，慰めてあげる	3.5	7.0	24.8	45.5	18.8	0.3
3．勉強や仕事のことで問題を抱えているとき，アドバイスをしてあげる	4.1	8.3	28.3	43.0	15.6	0.6
4．学校や職場，地域，家庭などでの人間関係について悩んでいるとき，相談に乗ってあげる	5.1	5.1	22.9	46.8	19.7	0.3
5．落ち込んでいるときに元気づけてあげる	3.5	6.1	22.3	40.1	27.7	0.3
6．友人にとって重要なことを決めなくてはならないとき，アドバイスをしてあげる	4.8	8.9	33.1	40.1	12.7	0.3

Relationship Between Social Support Exchanges with Friends and Ego Identities : Gender-based Differences Among University Students

Toshihito Isoya (Graduate School of Humanities, Meisei University) and Hideki Okabayashi (Department of Psychology, School of Humanities, Meisei University) *Meisei University Annual Report on Psychological Research, 2012, 30, 7—16*

The purpose of this study is to examine the gender differences in the relationship between emotional support exchanges with friends and ego identities among university students. A questionnaire survey was conducted on 356 students, and 313 valid responses were collected. As a result of analysis of variance, gender differences of its relationship were found. In order to establish their ego identities, it is important for male students to provide emotional support to their friends. However, it is important for female students not only to provide emotional support to their friends but also to receive it from them. Future research might focus on the different mechanisms used by both genders in the process of establishing their ego identities.

Key Words : Social Support, Ego Identity, Adolescence, Friendship